



「できるかぎり、できることを」

こぐれ よしこ
小暮 淑子

1930年(昭和5年)
石川県金沢市生まれ
平井在住



少年野球との出会い

子どもが小学校2年生の時にチームに入れていただいて、そこから少年野球との関係が始まりました。江戸川区学童少年軟式野球連盟は地区ごとに9つに分かれて活動していて、子どもは小松川平井地区のクリーン少年野球連盟に所属していました。中学に上がるので、昭和55年に卒部しましたが、その時監督から声をかけられたのをきっかけに、母の会を立ち上げるようになりました。昭和56年12月、クリーン少年野球連盟で10周年の記念行事のためでした。

あわただしく作ったのですが、今まで続いています。もともとボランティア活動は嫌いじゃなかったんだと思います。PTA活動でも何でも指名されれば「いや」と言ったことはありません。野球をマスターしているわけでもないし、声援だけなんですけれど、野球が好きですから。

少年野球はチームごとの会費制ですが、クリーンエール母の会は会費を徴収しません。子どもさんの入部と同時に、保護者の方に会員になっていただきます。本当にゼロからの出発でしたので、資金集めに年に2回のバザーをしました。小松川平井ふるさとまつりでは毎年、カレーライスと煮込みの模擬店を出します。会費を頂かないから、その代わりにいろいろ協力していただいています。

祖母のもとで

わたしは金沢で生まれました。父の顔を知らないんです。話によりますとね、背がスラッと高くて、いい体格の人だったらいいんですけど、わたしが生まれてすぐ、1年ぐらいで亡くなっているんです。

母に連れられて実家に戻り、母の再婚で京都に移りました。本当に小さいころ、たぶん3歳くらいだったと思います。その母も病弱で、私が小学生の時に亡くなり、その後義父も亡くなりました。本当にかわいがってもらって、亡くなる時に、本当の父親でなかったということを聞かされ、びっくりしました。そうこうしているうちに学童疎開が始まって、縁故疎開で石川県小松の母方の祖父母に引き取られました。両親が早く亡くなったので、あっちこちた

らい回しされているみたいな感じで、名前も何度もかわりました。淑子だけは変わらないんですけれど。義父の連れ子だった義兄も戦死しました。肉親との縁が薄いんです。

祖父母のところには母の末弟がいました。叔父ではあってもわたしとは3歳違い。きょうだいのようなものです。よくけんかしながら遊びました。寝る時なんかは祖母を両側から挟んで、奪い合いました。

そのうち、祖母の長男にお嫁さんがきて、子どもが生まれます。お嫁さんにはよくしてもらったし、わたしもその子をおぶって遊びにいったりしたけれど、お嫁さんは、やはり自分の子が一番かわいいでしょうね。そのころから何となく居心地が悪くなって、家を出たいと思うようになりました。

中学校に行きました。まだ戦中ですよ。お隣には、たまに帰って来るすてきなお姉様がいました。看護婦さんでした。憧れて、篤志看護婦になろうと思いました。昭和17年からは制度が変わって、中学の途中からでも入学できたので、日赤の看護婦養成所に入りました。当時は、速成で静脈注射はできないけれど、三角巾の包帯法とか、皮下注射までの全課程を終えて、満州への派遣が決まりました。ところが、なんと行く3日前に終戦。なんだか力が抜けたって言うか、やめたってことになって、以後、看護婦になることはありませんでした。

それから1年ぐらいいろもしいで家にいましたが、終戦直後でだんだん食べるものもなくなり、その時自分でも感じるものがあるって、家を出ることにしました。そのころが反抗期だったのかと思いますよ。

箕面に住んでいた祖母の甥が経営する印刷会社が大阪の桜橋にありました。祖母の口利きで、叔父の家から桜橋まで通いました。当時箕面には路面電車が走っていて、宝塚の生徒さんたちがよく乗っていました。きれいでね。追っかけみたいなこともしました。昭和22年、17歳のころです。大阪も楽しかったし、大阪に行ってよかったと思います。

夫の協力

母の会を立ち上げた昭和50年代半ばには、子どもは

13チーム、500人近くいて断るのに苦労していました。今は子どもの数が減って、運営が大変なんです。そのころは遠投で何メートルとか、何秒で走るとかの選抜試験があって、入部を希望しても入れない子どもがいました。今は入りたいっていう子どもが減っちゃって。入部する子を集めるために、ずいぶんPRするんですよ。でも、子どもたちは10人に1人、入ってくれたらいいほうですね。



◆野球チームの子どもたちと(小暮さん提供)

それからお茶当番があつて、働いているお母さん方は負担に感じていることもあるでしょうね。お父さん方は日曜日に朝5時起きて子どもたちの指導やっています。そのがんばりを考えると、おにぎりの一つぐらい、お茶の一杯ぐらい出さないっていうのは申し訳ない気がします。だから、お母さん方にも家の中でできることをしようと言うんですけど、どうしても係は当番制になります。お仕事の都合で、どうしてもできないっていう方には「しなくていいのよ。できる人がするから」って言うんですけど、自分自身が心苦しくてやめていく。そういうことが多々あります。

子どもたちの練習場も、関わり始めたころは近くの工場の空き地をお借りしていました。野球場ではないので、ナイトゲーム用の照明がなくて、草ぼうぼう。石ころだらけ。子どもたちは石ころを拾ったり、ボールを探すのも大変でした。空いている時しかお借りできないので、朝早くから、練習に行っていました。でも学校の方から「少年野球の子は居眠りばかりする」と言われるので、今は夕練にかわっています。夕練となると、お父さん方は残業があつても早く帰ってきてやらなくてはならないので、なんかちょっと申し訳ないのですが、夕練をメインにやっています。小松川高校のグラウンドを使っていない時だけ借りましたこともあります。現在は、河川敷に整備されたグラウンドがあるので、使っています。本当に良い環境になりました。

今は少年野球発足当時とは違って子どもたちが減り、チームを維持するのも大変になっていますけれど。わたしたちも多少は貢献しているかなと思っています。前に感謝状をくださるって話があつたんですが、それなら、わたしじゃなくて夫にあげてくださいって言いました。会合が終わってからご飯を食べに出かけることも多いし、そこでまたお話が盛り上がることもあ

ります。けれどもどんなに帰りが遅くなっても文句を言われたことがありません。夫は元公務員で宿直もあつたのですが、宿直明けでも、お休みで家にいる時は子どもにご飯を食べさせてくれました。だから、家を空けることで困ったことはありませんでした。夫もボランティア活動に対する理解がありました。その点も恵まれていましたね。もちろん子どもにも感謝しています。子どもがいなければ、PTAもできませんでしたからね。

子どもは国の宝

ナイトウォークってご存知かと思うんですけど、6年生を対象とした卒業記念の行事なんです。小松川平井地区の6年生と保護者が卒業記念に夜通し歩きます。小松川小学校を午後10時に出発して、千鳥ヶ淵間で27キロの行程を歩いて、朝5時か6時ごろ、小松川小学校に戻ってきます。青少年育成小松川地区委員会の主催で、わたしはその時に一緒に歩くわけではないのですが、統括副委員長としてお手伝いもしています。

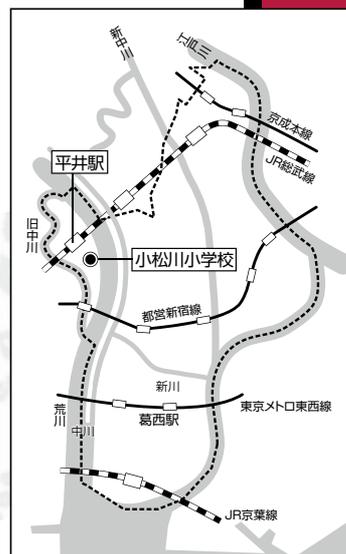
わたしも85歳になります。「いつまでやるの」とか言われたこともあります。でも子育ては「一部の人が関わるのではなく、多くの世代の人が関わる必要がある」とか「したくたつてできない人がいる。できる人がしなくてはその年代の意見がなくなる」という考えもあります。

地域ミニデイサービスというのがあつてね。小松川平井地区では5か所。お年寄りが閉じこもらないように、昔の歌を歌ったり、軽い体操をしたりしているんですよ。そこでファミリーヘルス推進員としてお手伝いをしています。

外へ出てボランティア活動するのに、苦労って言えば、本当に、心身ともに大変なことはありましたよ、確かに。でも、終わったら、みんな「やってよかったわね」って言うてくれることがあれば、苦労じゃないでしょ。

PTA時代一緒にやってきた仲間も30人ほどいましたが、遠くに引っ越ししたり、介護や看護の問題を抱えたり、自分自身の体調が思わしくなくてボランティアがしにくくなったり。最近もわたしより10歳以上も年下の方が亡くなったりで、現在では9人。わたしはいつまでできるのかしらと考える時もあります。

でも、この歳になると、前のことを覚えているより、次の日のことを考えているから、過去を振り返っている暇はないの。振り返っては前には進めません。子どもは国の宝というくらいだから、やっぱり、子どもの時は明るくスムーズに順調に育って欲しいと願う。みんなそう思ってボランティアやっているんじゃないでしょうか。



◆インタビュー／2015年9月8日
2015年9月29日

◆聞き手／あい宏枝・小宮和枝
◆コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆
江戸川区女性センター
☎5676-2455(代)